



『eコミュニティが変える日本の未来 地域活性化とNPO』(NTT出版)より

## 第二章 心の通い合うまちづくりを目指して NPOフュージョン長池

### まちづくりはアニメ映画「平成狸合戦ぽんぽこ」から始まった NPOフュージョン長池 理事長 富永一夫さん

NPOフュージョン長池の源流となったのは、多摩ニュータウン長池公園せせらぎ通り北団地(通称:せせらぎ北団地)で開催したアニメ上映会である。一九九五年八月二七日、夏休み最後の日曜日であるこの日、小さな子供たちのために上映したのは「平成狸合戦ぽんぽこ」だった。

スタジオジブリ制作、高畑勲監督・脚本・原作によるこの作品は、多摩丘陵を舞台にした物語である。ニュータウン計画によって、生活をおびやかされたタヌキたちは、開発を阻止するために、先祖伝来の「化け学」を復活させ人間たちに戦いを挑む。タヌキたちの一世一代の「妖怪大作戦」が始まるのである。しかし、タヌキたちは人間の進める開発を止めることができず、結局は住むところを失ってしまう。こんなストーリーのアニメである。

イベントを企画した富永一夫さん(NPOフュージョン長池 理事長)は、自分たちが住んでいるところを舞台にしたアニメだから、興味を持ってくれるのではと思って上映会を行った。やはり子供たちは大喜びで楽しんでくれたのである。ところが、実際にこのアニメを観た富永さんは、少なからずショックを受けた。もちろん、子供の親たちもショックを隠せないようだった。

なぜなら、人間にとって住みよい環境だったのは、実は昔からあった自然の破壊と、そこに住む動物たちの生活を奪ったものであったからである。そんな犠牲の上に自分たちの快適な生活があったのだということに気づかされた富永さんは、このイベントの後、しばらく悶々と悩み続けたという。

さて、富永さん一家が、初めて多摩ニュータウン(ホームタウン南大沢)に引越してきたのは一九八六年四月。現在のせせらぎ北団地に移り住んだのが、一九九四年四月のことである。家庭の事情による引越で、南大沢在住時にいったんつかみかけた地域での温かい人間関係を失ってしまった富永さんは、もう一度このせせらぎ北団地でつくりなおしたい、そういう思いをいただいていた。そのため、せせらぎ北団地に移転した後、三月に行われた入居説明会を兼ねた管理組合の設立総会に参加し、その席上で副理事長に選任されることになる。

この管理組合の役員活動には、次のような鉄則があった。

- 一、初代の理事が仕事をやりすぎると、その後の理事さんたちが迷惑するので、理事会は月一回以内にすること。
- 二、団地の全組合員に情報公開をするために「理事会だより」を発行すること。必要な時は労を惜しまず説明会を実施すること。
- 三、団地の全組合員で仕事を分担して、誰かに仕事が集中しないように実行すること。

つまり人にはいろいろ事情があるし、考え方も違う。それを念頭に置いて、無理をしたり相手を説得したりせず、できるときにできるところまでをやればいい。「いい加減」は「良い加減」として肩肘張らずにやればいい。とらように、緩やかな取り決めで、団地運営が始まっていったのである。

翌一九九五年一月の理事会では、建物及び設備に関する専門委員会、機械式駐車場に関する専門委員会、コミュニティ(自治)に関する専門委員会の設立が決定した。富永さんは、コミュニティ委員会のメンバーとして、このせせらぎ北団地での活動を始めることになるのだ。その一環として企画し、開催したのがアニメ上映会だった。

しかし、良かれと思って上映したアニメから、重大な問題を突きつけられた格好になってしまったのである。

## まちづくりのシンボルとして『ぼんぼこたぬき』を

悩んでいた。否定的な考え方から、何もプラスのことは生まれません。確かに、たぬきたちは人間に負けただけで、われわれ人間は、その後新しく引越してきた地域のことを真剣に考えている人たちと、従来ここに住んでいて、開発という現実を受け入れていこうとする人たちが、自然や動物、あるいはここ八王子市や東京都、都市公団の方々とも共存していればいいのではないか。このまちの人たちと一緒に『平成狸合戦ぼんぼこ パートII』をやればいいんだ。そうひらめいたのです」(富永氏、以下同じ)

究極の物好き、ものすごい行動力と並外れた好奇心を持つ」と自称する富永さんは、さっそく行動に移す。

まず、自分自身が思ったまちづくりを進めていくために、多摩丘陵を知ることから始めようとした。そんなときに出会ったのが、新聞折り込みのタウン紙『多摩ニュータウンタイムズ』である。このタウン紙を読んだ富永さんは、さっそく社長の横倉舜三さんに電話をかけて、会ってしまうのだ。実際に会ってみると、多摩丘陵のすべてを教えてくれるのは「この人しかいない」と富永さんは直感した。

これを機会に、富永さんは横倉さんの事務所を訪ねるだけでなく、『多摩ニュータウンタイムズ』の編集会議にも出席したというから驚く。そうしたなかで、横倉さんの著書『多摩丘陵のあけぼの』という上下二巻の本を読むことになる。この本には、昭和四〇年代に降ってわいたように始まった多摩ニュータウンの開発計画のことが詳しく記されていた。多摩丘陵という土地の歴史、用地買収をめぐる経緯、開発計画の冷静な分析、そして横倉さんのまちづくりへの思い。いわば、横倉さんの一代記ともいえるこの本を読むことで、富永さんは多摩丘陵の多くを知ることになるのである。

こうした交流を通して、富永さんはアニメ『平成狸合戦ぼんぼこ』が、実は横倉社長の話を参考にしつつ作られたと知るのだ。『平成狸合戦ぼんぼこ パートII』をやろうと決めていた富永さんは、横倉さんとの『ぼんぼこ談義』で盛り上がった勢いもあったからか、スタジオジブリの高畑監督に会いに行く。

約束を取りつけて高畑監督に会った富永さんは、「まちづくりのシンボルとして、ぼんぼこたぬきのキャラクターを使わせてほしい」と申し出た。その結果、監督からは「公共性の高い話であれば、キャラクターを貸してもいい」と快諾してもらったのである。

もちろん、富永さんは当時、NPOという存在も知らなかったが、まちづくりを通して将来的には公共性の高い活動をしようと考えていた。いずれ『ぼんぼこたぬき』のキャラクターを使える日がくることを確信していたに違いない。

## ミックスド・コミュニティ実験の場

せせらぎ北団地でこのような活動を始めるもう一つのきっかけとなったのは、ある地域情報誌との出会いがあったからである。その情報誌とは一九九五年四月に配布された『FUSION見附ヶ丘』の創刊号。この情報誌の発行責任者は、住宅 都市整備公団（現 都市基盤整備公団）である。せせらぎ北団地を含む見附ヶ丘地区というのは、公団が推進している「ミックスド・コミュニティ」の実験地であったという。

ミックスド・コミュニティとは、職業や収入の異なる世帯は地理的に分かれて暮らすというような現象が進むなかにおいて、この問題を解消するために行う施策である。この階層分化に対して、国内外でもさまざまな試みが行われており、政府や自治体に限らずミックスド・コミュニティによる解決を求めてきたという経緯がある。

要するに、従来、公営住宅を供給する際には、大量 画一的なまちづくりや住宅の供給を行ってきたが、それは人々が快適に暮らせるまちには程遠い。もっと、その地域を活性化するようなまちづくりを行える施策を展開すべきだという考え方から、ミックスド・コミュニティが導入されるようになったのだ。

もう少し具体的にいえば、住宅をはじめ、商店、病院、オフィスや事業所など、さまざまな用途を持つ施設が混在し、融合するまちづくりを推進すること。また、子供から大人までの多様な年齢構成からなる、いろいろな職種の人々が交流するまちづくりを目指したものである。

多摩ニュータウンでは、このミックスド・コミュニティの実験地として、人や車が団地から団地までスムーズに移動できるよう、ハード面でのミックスド・コミュニティが計画実施された。その一方で、人的交流が活性化するようにソフト面でのミックスド・コミュニティをも目指して地域情報誌を発行したという経緯を持つ、非常に珍しいケースとなった地域である。しかも、この情報誌は「公団批判をしない」というのが条件で、あとはかかわる住民が自由に誌面を構成していいということになっていた。

この創刊号を読んだ富永さんは、さっそく、知人二人とともに編集を担当しているフラッシュという会社の社長である鈴木雅徳さんに会う。そうして、鈴木さんの話から公団の開発担当者のコミュニティ開発に対する思いを知る。これが、近隣の団地の交流を始めるきっかけとなるのである。

一九九六年七月には、近隣の五団地と「見附ヶ丘連絡協議会」を結成する。ちなみに五団体とは、長池団地、長池第二団地、長池公園せせらぎ通り北団地、長池公園せせらぎ通り南団地、コープタウン見附橋団地である。この連絡協議会は、見附ヶ丘の住人がお互いの友好を深め、親睦を図るために発足させたものだ。

この連絡協議会は、一九九五年八月に開催された「見附ヶ丘地域情報交換会」が発展したもので、団地間のつながりを絶やさないという考えから運営されている。この情報交換会でのユニークな活動として、地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』の編集会議を兼ねさせたというものがある。最初は、交換会を続けていくためのつなぎとして提案したものだったが、これが後々大きな役割を果たすようになる。

編集会議と意見交換会を兼ねたこともあって、この『FUSION見附ヶ丘』は住民の意見や問い合わせがベースになって記事が編集されるようになっていく。つまり、コミュニティを支える重要なメディアとして、機能し始めたのである。しかし、この情報誌は二年という時限つきのものだった。存続を望んだ富永さんたちは、フラッシュの鈴木さんに相談する。富永さんたち住民が協力的、かつ楽しんで参加しているということが評価を受け、公団側から承されて一年間延長されることになるのである。

## 黒子に徹する面白さを実感

さて、見附ヶ丘連絡協議会ができ、その最初のイベントとして「第一回見附ヶ丘フェスティバル」を開催することになった。一九九六年八月のことである。開催に当たっての取り決めも実にユニークなものだった。

一、八月二五日(日曜日)に「第一回見附ヶ丘フェスティバル」を実施する。

二、実施方法は、各団地の判断で各団地のなかの集会所等を使用して行う。金銭も各団地の判断で処理する。

三、極力無理をしないで、手伝った人たちのほうが楽しくて、またやりたくなるようにやる

四、会議は極力やらない。打合せは六月、七月に各一回と開催日一週間前の三回のみとする(そうしないと夏休みに家族旅行等ができなくなる)。

五、この見附ヶ丘フェスティバルを地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』で特集する。

参加する団地の人々の自主性に任せ、手が必要になったら貸せばいい。これを肯定することが、ボランティアを成り立たせる要素になると、もうこの時点で富永さんは気づいていたのだろう。

「人手がないなかで活動をやり始めたので、最初は何をやるにしてもスタンドアロン型でやっていたというのが根っこにあります。ソフトボール大会をやりたいとか、公園に花を植えたいとか。すでに「やりたい何か」を持っている人、周りの人たちのそういう活動を私が支援するというパターンでやっていたのです。本来、そんな後方支援のような役割は、面倒くさいばかりで、あまりやる人がいないかもしれません。でも、私の場合は逆に後方支援を喜びというふうに感じて、自分も楽しんでいたのだと思います」

その面白さを、富永さんはオーケストラにたとえて言う

オーケストラのほぼ真ん中、指揮者の延長線上にティンパニー(打楽器)がある。ティンパニーを制すれば、オーケストラを制す」と言われるように、ティンパニーは非常に重要な役割を果たす。指揮者と合わせて、オーケストラ全体のリズム感を司る。地味な楽器ではあるけれども、オーケストラの演奏とティンパニーの音が溶け合うことで、極上のハーモニーが生まれる。

指揮者は目立っているが、ティンパニーは目立たない黒子にすぎない。しかし、その面白さというのは、言いがたいほどだというのだ。要するに、富永さんは自分は黒子に徹するけれども、その面白さを十分に知っているから、喜んでいる人を見て、これでいいと自己満足しているというのである。

そして、ここにもう一つ、技術という黒子加わったのである。

## コミュニティ・サーバーとはいったい何だろう

大きな転機は、一九九七年九月に訪れる。この年は、多摩ニュータウンの事業に着手して三〇周年という節目の年。さまざまな三〇周年記念行事が行われるのだが、そうしたなかに産・官・学・民が連携してできた多摩ニュータウン学会創設というニュースがあった。

それまで、せせらぎ北団地と見附ヶ丘連絡協議会という活動に終始していた富永さんだが、自分も新しい活動をしたいと思い始めていた。そんな矢先の学会創設というニュースである。思い立ったらすぐ行動に移す性格は、このときにも発揮された。

富永さんは学会の事務局にすぐ足を運ぶ。そして、この記事に登場していた大妻女子大学の炭谷晃男教授に会うのである。炭谷教授の話から多摩ニュータウン学会の目的や、今後の計画について知ることができた富永さんは、その後に関かれた運営会議にも出席する。そこで富永さんは、後に活動のなかに「コミュニティ・サーバー」という新しい概念を紹介してくれる羽田野二穂さんと会う。

この会議に出席したおかげで、富永さんは「第一回多摩ニュータウン学会研究大会」でプレゼンテーションすることになるのだ。九月二七日に開催された大会で、富永さんは「自由に自立した人たちがつくる街」というテーマで、見附ヶ丘連絡協議会の活動や、自分の夢を語った。この報告をきっかけに、富永さんと見附ヶ丘のコミュニティ活動は、多くの人に知られるようになる。

また、この大会で富永さんの次に報告したのが、皆に親しみを込めて「牧場のおっさん」と呼ばれていた鈴木享さんである。この鈴木さんは、多摩ニュータウン開発に反対しながら牛を飼っているが、これからは共存していきたいと表明した人。まったくユニークな人だが、驚くことにこのときすでにインターネットで情報発信をしていたというから、こんな人に富永さんが興味を持たないわけはない。大会後、鈴木さんのところを訪ねた富永さんは、多摩丘陵の昔話を聞かされることになる。こんな出会いから、ますます富永さんは地域コミュニティの活動にのめり込んでいくことになるのだ。

そして、ある日、羽田野さんが突然やって来て、コミュニティ・サーバーという概念について熱心に語り出したのである。富永さんは当時の様子を次のように語る。

羽田野さんはこう言うのですよ。私の言うネットワーク型の組織観、それと人々のスタンドアロンの活動があるという状況、そのなかで支援者である私は、アナログ的に考えてもサーバー機能だ、というわけですね。でも、人間だから休まなきゃいけないし、二四時間戦うわけにはいかないでしょう。その代わりにコンピュータを使えば、二四時間稼働していて、常に情報をつないでくれるメーリングリストというものができる。あるいは、ホームページというものがあって、それも情報を発信できる。それを私が使い、インターネットのコミュニティ・サーバーという概念がセットになることで、私の言うネットワーク型の組織が生きてくるかもしれないと。羽田野さんは、自分がシステムサポートをするから、コンピュータをどうしようか、どう使おうかということは考えないで、明るい楽しい活動のためにインターネットを使ってくれたらいい、と言うんです。ただ、最初はメーリングリストやホームページ、サーバーと言われてもチンプンカンプンでした。まず、言葉そのものがわかりませんでした。ただ、メーリングリストを使うと、一度に一〇〇人とも話ができる、という話が心に残りました。

羽田野さんは、当時、ラクーン多摩（現・アプリケーションプラス）という会社を設立したばかり。ITコンサルタントとして、人のネットワークをつなぐことでコンピュータが人の役に立つことを望んでいた。そして、コミュニティ・サーバーという概念の実証実験の相手に富永さんを選んだのである。もし、コミュニティ・サーバーという概念が実際のまちづくりに活かされることがわかれば、羽田野さんにとって自分の仮説の証明になる。また、実験に成功すれば、会社としてはセールスプロモーションの格好の材料になるということだ。

実際にメーリングリストを体験して導入を決める

インターネットは根暗な奴がやるものだ。パソコンなんて大嫌いだ。人と会って話をしていた方がいい。そんなふうに思っていた富永さんも、コミュニティ活動に対する、自分の体力や時間などが物理的な限界に近づいていることを感じていた。だから、羽田野さんにコミュニティ・サーバーの話聞いても、どうしようか迷っていたのである。

羽田野さんの技術力からすれば、本当にわずかな日数でメーリングリストなんかできるというわけですよ。だけど、私は羽田野さんから提案されたけれども、「ちょっと、待っててくれ」と言って四～五カ月、逃げ回るんです。

富永さんは、できあいのメーリングリストを紹介してくれる人がいたので、そういうものに入ってみることにした。そこで、誰かが何かを発言したときに、どういう対応をするのか、どういうイメージになるのかを一所懸命さぐり自ら体験したのである。

「人と人がつながる怖さというのを、私はここで体験したわけですね。メーリングリストといってもいいことばかりじゃない。かならず『明』と『暗』があって、トラブルが起こるものですよ。日常的にコ

ンピュータがつながっていて、一言『バカヤロウ』と言う奴がいると、一〇〇人に『バカヤロウ』と届くわけじゃないですか。これは揉め事が始めると、とんでもない道具になってしまうと思いました」

そうして、富永さんはある結論に達する。

地域というのは、揉め事を起こしたら最後だ。意見が違うだけなのに、議論をして喧嘩になってしまったらおしまいになる。楽しい話をすれば、誰も傷つかない。他人のことを語ってはいけない。特にメールのうえだと、文字として残るからなおさらまずい、ということである。また、政治や宗教といったイデオロギーに関するようなことは御法度、コンピュータについての難しい話もメーリングリストでは語らない方がいい、と。

九月からずっと試してみて、翌年の一月か二月ぐらいになって、自分のなかでわかったことは、コミュニティというのは一つの生命体である、生命ある空間として育てなくてはならないということですね。だから、『心こそ第一』だと。私たちは『ぼんぼこな心』と言ってきましたから、『ぼんぼこな心を真ん中に置いて、いっさい揉め事を起こさないネットワークをつくろう』と。ふわっとアメーバのように広がり、人を真綿でもって包み込むような、優しいネットワークをつくりたいと思いました。その次に考えたことは、私の言うことをわかってくれる人たちとだけ最初に立ち上げようということです。それで最初に集まった二〇人ぐらいでメーリングリストを始めたわけです」

メーリングリスト『ぼんぼこネット』は、一九九八年四月にスタートする。

富永さんは、ネット上でのトラブルが怖かったから、一〇〇人を超えるまでは、全員に会って話をした。『ぼんぼこネット』に入る人に対して、『このメーリングリストは、地域活動の楽しい話をしているので、皆、揉め事を起こさないのですよ』と。そうすることで、何となく富永さんが望んでいるメーリングリストの性格を伝えていき、その趣旨に賛同した人たちが増えていった。

始めたばかりの頃は、『帰りがけに飲み屋に行こう』とお誘いメールを出したり、『会社にいるなら仕事をしろ』などと冗談半分にメールを入れたり。そうしているうちに、徐々に、だけど、劇的に変わりました。皆、面白くなって、一日に三〇本も四〇本も飛び交ったこともあったわけですから。それはそれはすごい勢いで活動が広がったわけですよ。ここで、メーリングリストがもたらしたものは、ある種の革命だと思うんです。革命という言葉は、価値観が一八〇度ひっくりかえることというふうに定義しているのですが、現在、私たちのメーリングリストは四五〇人にまでなっています。ですから、私が『んにちは』といってメールを一本出すと、四五〇人にぱっと届く。そして、アナログ型活動をサポートする。デジタル・ネットワークと、アナログな活動がともにある、ということが必要で、大切なんですね」

心配していたとおり『ぼんぼこネット』でもゲのある発言をする人が実際にいた。『ぼんぼこネットの連中はネチケツをわかっていない』『ドシロウトばかり集まって何をするんだ』『このネットはむちゃくちゃだ』というように。そんなことがあると、誰かが『まあまあ』というメールでなだめたり、『そういうご意見もあるのかな』と言って、過激な発言に対してやわらかくカウンターとなる発言を返すことでバランスをとって、ネットワークのなかのコミュニティが荒れた雰囲気にならないようにしていると、そういう発言をする人たちはいつの間にかネットワークから外れていったというのだ。これも、富永さんが用心深く、最初は気の合う人たちからメーリングリストに入ってもらったことが幸いしたのだろう。

## お父さんたちが自主的に活動を始めた

この『ぼんぼこネット』が稼働して、わずか一カ月後、五月の連休明けにPCレスキュー隊が誕生する。コンピュータの苦手な人がトラブルを起こしたり、わからないことがあったら『誰か手の空いている人が助ければいい』という発想だ。

非常に優しい心づかいから始まっているのです。新しい技術だから技術についていけない人たち

がいる。だからこそ、地域の皆で助け合わないといけな。その人たちを何とか抱え込むようにして一緒に連れていきたいという心根と、具体的な行動がすぐ結びついたわけです」

PCレスキュー隊の誕生で、お父さんたちの活動ばかりでなく、意識も大きく変えることになった。日頃は会社勤めで忙しいお父さんたちが、地域のなかに入ってきたのである。週末になると、自前の教科書を用意して、保育園や小学校で地域の人や先生たちにわかりやすく教えたり、インターネットについて説明したり、俄然、張り切りだした。

つまり人は、自分の興味のあるものに出会うと、損得を考えないで行動をするということだ。誰も強制しないのに、勝手に手弁当でやり始める。そして、やり始めると、最後まで責任感を持ってやり遂げることになる。結局、ボランティアを楽しみ始めるということなのだ。

もちろん、PCレスキュー隊の活動だけでなく、それまでは地域情報をまったく知らなかったお父さんたちも変わった。毎日、自宅と会社の往復ばかりだったお父さんたちは、お母さんたちの井戸端会議についていけなかったし、興味さえ持っていなかった。そうしたお父さんたちが、「ぼんぼこネット」につながり始めたことにより、会社に居ながらにして地域情報を瞬時に手に入れることができるようになったのである。家族のことには興味があっても、地域のことについては関心のなかったお父さんたちが、大きく変わるようになったのだ。

いわば地域情報の弱者だったお父さんたちが、逆に地域情報でお母さんたちに勝てるようになったのである。そうして、地域コミュニティのかかわりを持ち始めたお父さんたちは、本気になって地域活動に取り組み始めた。メーリングリストを活用して始めた活動は、どんどん広がっていき、それぞれのお父さんたちが得意な分野で力を発揮し始める。高度情報化支援事業「高支隊」、住宅管理支援事業「住見隊」、住まいづくり支援事業「夢見隊」など、今では一もの暮らしの支援事業に発展しているのである。

ここで、フュージョン長池が行っている代表的なサービスについて簡単に説明しておこう。

地域活性化支援事業「ぼんぼこ活動」は、フュージョン長池の原点でもっとも重要な活動で、地域のさまざまなサークル活動等を支援している。この支援活動のなかで役立ったのがインターネットを利用したメーリングリスト(ぼんぼこネット)とホームページ(ぼんぼこWEB)である。地域がインターネットのおかげでゆったりとした関係でつながって情報の共有化が図れるようになったことにより、地域活動を立ち上げたり参加したりする人々に具体的なきっかけを提供したことにより今日のフュージョン長池がある。

自然館支援事業「自然隊」は、二〇〇一年七月より八王子市から八王子市長池公園自然館(愛称:長池ネイチャーセンター)の管理・運営を受託したことにより誕生した。この支援事業の役割は、「自然を中心テーマにしながらもさまざまな地域活動に自然館を自由に使ってもらえるよう場の提供者」として来館者を主役にできるような管理・運営をすることがその役割である。最初の一年間で約六万人の来館者を得たことで一応の成果を達成しているようだが、地域活動の情報発信基地としてさらなる飛躍を目指し、インターネット放送局を二〇〇二年末までに構築する予定である。高支隊の支援で地域住民が動画の情報発信ツール(インターネットライブ中継)を持つときにいったいどのような感動を与えるかが楽しみだ。

高度情報化支援事業「高支隊」は、PCレスキュー隊に地域の方々から高速インターネットをわがまちで利用できるようにしてほしいという要望があって誕生した。東京めたりっく通信と連携して、二〇〇〇年二月一日よりADSLの申し込み仲介を開始して、二〇〇一年三月末までに五〇〇件の申し込みを受け付けて三五〇件を開通させた。

住宅管理支援事業「住見隊」は、分譲団地の窓口管理・会計管理・修繕等のコンサルタント業務を行っている。現在年間契約をしている分譲団地は二つである。これからは地元の行政とも連携し

ながら団地再生を考えている。そのために必要な資金を保全するためのペイオフ対策も提案している。

住まいづくり支援事業「夢見隊」は、自分たちの家を地域のプロたちの力を結集して自分たちでつくるプロジェクトである。今まで、与えられた選択肢のなかから住宅を選ぶしかなかったのに対し、このプロジェクトは、家族構成や好みのライフスタイルにあった住まいを適正な価格で手に入れようとするものだ。実際に一四世帯の方々が、建設組合を結成して都市基盤整備公団から土地をグループ購入し、二〇〇三年夏には入居を完了させようとしている。

このほかにも食のお裾分け支援事業「おつまみ作り隊」やリサイクル支援事業として生ごみと牛糞の堆肥化事業も支援している。

地域の暮らしを豊かにするフュージョン長池の支援事業は、自由に自立した活動としてどんどん拡大しているが、それを可能にしているのはインターネットという情報ツールと行政や企業から独立しているNPO法人が存在しているからである。

## 理想と思っていたネットワーク型組織を具現化へ

富永さんには、実は学生時代に「書かなかった卒論」というのがある。当時、経営学部で経営組織論というゼミに入っていた富永さんは、「ピラミッド型組織からネットワーク型組織への転換」というテーマで書く予定だった。ところが、担当教授が他の大学へ転じたため、書かずに終わってしまったのである。三〇年近くも前のことであるから、このネットワーク型組織論という発想は、非常に先見性のあるものといってもいいだろう。

卒業後、日本テトラパックに入社した富永さんは、ピラミッド型組織の優れた機能と、その限界を嫌というほど味わう。たとえば、世界各国に出張したときに、現地のテトラパックの社員や通訳がアテンドされており、仕事を滞りなくこなすことができる。ピラミッド型の組織だから、上から情報が発信されれば、世界中どこにでもすく伝わるといえる。これが、ピラミッド型組織がポジティブに動くときのすごさであろう。

その一方で、ピラミッド型組織で活動している人間は部や課が持っている組織目的に従った、ある決まった範囲でしか行動できない人がほとんどという現実がある。決まった範囲で動いているうちはいいが、その範囲を逸脱した行動を、(仮に必要であったとしても)個々人が自主的に決定し、実行することが難しい。それだけでなく、組織目的を逸脱した行動をとるといことが、組織の効率を落とし、ある意味では組織を破壊することにさえなるのだ。これが、ピラミッド型組織のネガティブな部分、弱みであり、ピラミッド型組織と人がぶつかりあう限界だといってもいい。とはいいいながら、ピラミッド組織もまた、人間が幸せになるためにつくられたものであり、その目的のためにピラミッド型組織しかない、という時代が長く続いてきたことも事実なのである。

富永さんは、ネットワーク型組織論が持論であったけれども、企業社会のなかで生きていくためにはピラミッド型組織を否定することはできないと思っていた。自分の価値観に合わなくても、肯定せざるをえないというわけである。それは、企業社会だけでなく、地域コミュニティのなかでも同じことに違いない。一人の人間が面倒を見ることができるのは、せいぜい五人くらいまで。アナログだけの組織では、それが限界であり、それが積み重なったのがピラミッド型組織といふことだ。

だから、会社にいるかぎりにはできないと思っていたんですよ。やはりこれは何かとんでもない技術ができてこなければ変わらない。アナログの組織、アナログの技術だけでやるかぎりにおいては、どうやってもピラミッド型組織しかできないのかなと。けども、インターネットが出てきて、それを偶然、教えてくれる羽田野さんという人がいて、地域コミュニティのなかでそれを使い始めたときに、びっくりしたんです。自分が卒論で書こうとしていた、青春の思い出みたいなものが、この技術を利用する

ことによって達成できるかもしれない。そう思い始めて、地域コミュニティにのめり込んでいくわけですね。最初はアナログであったとしても、組織そのものがやはりネットワーク型でなければ、私はeコミュニティの時代はこないと思っています。それをサポートする技術として、メーリングリストやホームページがあり、それはもちろん有効であるとは思いますが。しかし、確かにメーリングリストはITを駆使したものだけど、うまく使いこなしていくためにはその情報技術のシステム管理者だけではなくて、リアルな世界のまちなかの世話役のようなアナログ管理者みたいなネットワーク型組織運営のできる人が絶対必要です。

その管理人は人が大好きで、人の心がわかって、人の特質を見抜いて、それに対してポジティブにものを言う。要するに、いくらITを導入しても、何とかアナログ的に皆をまとめあげていこうとするタイプの人がいないと、できやしないのです。そう考えながら、コミュニティ活動を行ってきてわかったことは、やはり自分の価値観を共有化してくれる人がいたということ。そのときに、自分も喜びを感じるし、相手の人も喜びを感じるということですね。人と人というのは、デジタル・ネットワークでつながることによって、顔を合わせなくてもいい社会をつくるわけではありません。そうしたネットワークがあることで人と人がよりアナログ的に会話ができるようになって、楽しい関係や助け合いの関係を築けるようになるのです。そのために、道具としてITを駆使するだけなのですね。けっして、ITが主役ではなくて、あくまでも人が主役なのです。だから、ITは黒子として存在してほしいわけで、黒子が表に出ては駄目だと思います。素晴らしい技術が先にあっても、そこに人の心がなければ、仏つくなって魂入れず、何にもなりません。だから、今までのようにピラミッド型の組織をイメージした活動ではつながっていかないのです。インターネット社会というのは、アメーバのようにフラットにのびていく、そういうネットワークを築くことのできる社会です。要するに、自分の個性と役割を演じられる人だけが、自主自立して、スタンドアロンで通用することができるわけですね。

そして、何人かのスタンドアロンで活動している人たちをつなぎ合わせられる人が、サーバーとして存在できるわけです。コンピュータは二四時間三六五日、ひたすら動き続けますが、このサーバーというコンピュータを抱え込む人間サーバーがいて、人の心でもってさばっていくわけですよ」

## 地域のデータベースとなったホームページ

メーリングリストの次に立ち上げたのが、ホームページである。

地域の人で、後からフュージョン長池の活動に参加する人がいるわけですね。その人たちに、どのような活動をしていたのですか、どうしてこんなふうになっているのですか、ということを全部、語るなければなりませんね。でも、毎回、同じ説明ばかりさせられるものですから、私自身、時間的な制約もあって一つひとつに答えられないということもあった。相手だって時間を拘束されるわけだから、聞く方も大変ですし……。そんなことを言っていたら、以前からお世話になっていた南大沢の岡村隆さんが、『それじゃ、私がWebマスターとしてホームページをつくってみようか』というふうに言ってくれたんです。それで、一九九九年の四月にスタートしました」

岡村さんは、技術系タイプでシャイな人である。あまり人づきあいが得意でないタイプの人だと富永さんは評する。

そんな岡村さんが、地域に役立ちたいと申し出てくれたというわけだ。このホームページは、その年の六月、郵政省が主催した『ゆうゆうインターネットフォーラム』の『我が家のインターネット活用大作戦』で、『いきいきコミュニティで賞』を受賞。受賞の理由は『地域に大家族が帰ってきた』ということである。

三年以上経ってますます立派なホームページをつくり続けている岡村さんは、NPOフュージョン長池のWebマスターとして皆から高く評価されている。自分のもともと持っていた得意技を活かし、

無理のない状態で地域のなかで貢献する、まさにコミュニティに人ありきの典型であろう

ホームページの位置づけは、地域のデータベースということだ。メーリングリストで、メールのやり取りをしていますが、それはフローの情報であり、流れていって消えてしまうものにすぎない。それに対して、何月何日にソフトボール大会をやる、何月何日に長池公園の里山で田植えをやる、といったような情報はストックしてあげないといけない。だから、ホームページというのは、地域情報のストックの場所という位置づけである。

今では、NPOフュージョン長池の定款や会計報告なども載っているが、それはあくまでもコミュニティの人たちに情報を共有化してほしいから発信しているもの。地域のデータベースなのだから、地域の人たちに特化したものをつくったということだ。

「よく地域のポータルサイトが必要だと言われますね。それは、地域外の人をイメージしていつているわけですが、おもしろい話だと思いませんか。そんなポータルサイトを、誰が見るのでしょうか。地域のホームページは、地域コミュニティの人たちが楽しめるものでなくてはならないのです。だから、私たちは地域の人間関係を豊かにするためと、つなぎ止めるためと、後からやってくる人たちに寂しい思いをさせないという、きわめて人間的な発想でつくろうとただけなんです。そのための道具が必要だったからです」

## バーチャルネットワークを支えるリアルなメディア

このホームページの誕生と同時に、少し役割が変わったのが年間で四回発行していた地域情報誌の『FUSION見附ヶ丘』である。一九九五年四月に創刊された『FUSION見附ヶ丘』が『FUSION長池』として再スタートしたのが一九九八年五月のことである。

創刊当初は一〇〇〇部の発行だったが、『FUSION長池』(通巻一九号)になったときは六〇〇〇部、最終の『FUSION長池』二三号は七〇〇〇部となった。しかし、これで終わったわけではない。ホームページを主にして、情報誌を従にすることで生まれ変わるのである。

地域情報誌『NPO FUSION長池 ぽんぽこかわら版』(通巻二四号)は八ページで構成、発行部数は一万部である。もちろん、現在でも継続しており、発行部数は一万二〇〇〇部。京王堀之内地区のほぼ全戸と南大沢地区の一部に配布しているのだ。配布するのは、もちろんボランティアの人たちである。

コミュニティにおけるITの活用は、今でこそ当たり前であるが、バーチャルな(電子空間上の)メディアだけではうまくいくとは思えない。リアル・ネットワークがまずあり、リアル・ネットワークを補完し活性化させるのがバーチャル・ネットワークなのである。フュージョン長池の場合は、そうしたバーチャルとリアルを巧みに活用したというよりは、自然に融合してネットワーク構築に大きな力を発揮したといっているのだろう。

そのリアル・メディアの代表が、この『FUSION見附ヶ丘』であり、その後の『FUSION長池』や『NPO FUSION長池 ぽんぽこかわら版』なのである。たとえば、新しく生まれ変わった一九号の一面に登場した田中純さん一家は、神奈川県相模原市から多摩ニュータウンに引越してきた。田中さんたちは『FUSION見附ヶ丘』を見なかったら、このまちがどんなまちかわからなかったという。また、一九九八年七月の二〇号の一面を飾ったのは「長池公園の里山で田植え、国際色豊かに小学生らが挑戦！」という記事。国際協力事業団の研修生として南米などからきていた六人も含め参加者が約一五〇人になったというものだ。

富永さんたちは、このように地域に根ざした情報を取り上げ、メーリングリストやホームページを補完する意味でリアルなメディアを発行し続けてきた。要するに、人の顔の見えるネットワークを築くためには、どうしても手にとって見られるメディアが必要だということを実感していたのだろう。だから、

ホームページが本格的にスタートしたときに、かわら版としてリアルなメディアを続けようとしたのは、当然のことなのである。

## NPOとインターネット

一九九九年四月五日、富永さんは二一年間勤めていた日本テトラパックに辞表を提出する。「NPOフュージョン長池」のNPO法人としての設立総会に、中途半端な気持ちで臨むことは、一緒に活動する人たちに失礼であると思ったこと、もはや二足の草鞋では限界があると感じていたからだという。

私は会社員として二一年間勤めてきましたが、その経験とキャリアを投じて、この長池という地を豊かにするために、自分にどこまでできるか賭けようと思いました。やはり地域に根っこを持たないかぎり駄目なのではないか、そのために地域コミュニティはどうあるべきか、本当に真剣に考えた結果です。

実はコミュニティ活動がだんだん本格化するなかで、私は毎日多摩の田舎から都心に出稼ぎに行っているような気がしてきたのです。若いときは、国際的な舞台で活躍するとか、グローバル経済なんて意識して仕事をしてきましたが、それは狩猟民族のやり方だと思いますね。だけど、日本人はもともと農耕民族で、地域の田畑を耕して生きてきたのではないか。だから、農耕民族だということを忘れてしまうと、農業が疲弊し、食べ物が危なくなる。地域コミュニティもなくなって、助け合いもなくなってしまわないか。そんな危機感が強かったから、多摩丘陵の昔に戻ろうという気持ちになり私のコミュニティ活動が始まったともいえます。自分と家族、地域の人々とともに生きようと思ったわけですね」

そういう強い決意をして活動を続けてきた富永さんは、四月一七日の「NPOフュージョン長池」の設立総会に臨んだ。そして、五月三十一日に認証申請書が受理され、途中、申請の取り下げといった曲折があったものの、その年の一二月七日、「NPOフュージョン長池」は法人格を取得することになる。富永さんは理事長に就任する。

地域コミュニティの活動にのめり込んでいくにつれ、よくわかってきたのですが、ボランティアというのはある意味では何とも無責任な集団なわけです。心根はいいけれど、相手はボランティアには責任を要求できないんですね。だから、このボランティアでは、とても継続事業にならないと思いました。そうしたらびっくりしたことに、一九九八年一二月にNPO法が施行されるわけです。だけど、私はそれが何なのか知らなかった。それで、NPO法を学んでみると、これは第二の革命だと思いましたよ。インターネットをはじめとするITという革命的な技術がまずある。その一方で、ボランティアから派生していてもNPOという法人になれば、明確に組織されて、法の下に人格が与えられて責任感を要求できる人たちが真ん中に座る、と。それによって、これは地域サーバーができると思ったわけです。その事務局というのは、人格を持ったサーバーで構成され、自分一人ではない。法人として契約が結べて、組織として処することができるわけですね」

富永さんは、NPO法人になってしっかり体制固めをしておけば、やがては自分に代わる人が理事長をやっても事業は継続していけると判断したのである。NPOの運営をできる人を育てておきさえすれば、活動はつながっていくに違いない、責任感を持ってやるための、NPOという大きなフィールドを用意することで、可能性は広がると確信したのである。

それでも、富永さんはNPO法人にする際、なみなみならぬ決意をしなければならなかった。

「NPOは人を幸せにする革命になるかもしれない。組織が主役になるのではなく、人が主役になれる時代がもしかしたらつくれるのでは。そう思ったときに、本当にいてもたってもいられなくなりましたね。でも、こんな無謀なことは、誰もやらないんだらうなと思いながらね。まったく無謀な賭けだど悩

みつつ、半年間ぐらい寝られないような、胃がよじれるような思いもしました、会社を辞めよう決心する前ですね。本当にこんなことをやって、女房子供たちに責任は取れるのだろうか。だけどもいたたまれなくなって、自分から立ち上がったんです。自分の人生は限られている。だから、無謀なチャレンジをやって駄目だったら、女房の田舎に引きこもろうと。女房の実家は食料品屋さんを経営していますから、そこへ行けば家賃を払うこともないし、子供たちも大きくなっているから、店番やっても食えるのでは、そう思って決めましたよ」

これほどまでの決意があったからこそ、NPOフュージョン長池を設立することができたのだろう

また、富永さんは地域コミュニティの活動とインターネットについて、次のようにも語っている。

地域が舞台、住民が主人公、企業と行政は応援団。NPOというのは、地域住民が求めるものをつくり暮らしを豊かにして、生活の質の向上を図るものだと思います。インターネットは、地域でコミュニケーションを行うための小さな窓であり、窓から地域に入りやすくするための環境を提供するツールにすぎません。あくまでも、地域コミュニティの活動に参加するためのきっかけづくりをするものです。したがって、コンピュータを単に地域住民に与えても、地域を活性化することはできません。テレビのように、簡単に扱え、楽しくできるものであればいいわけです。電話が発明されたときに、すごい技術が発明されたとニュースになったけれども、今は電話で遠くの人とでも会話ができることは当たり前で、誰も話題にしません。電話という技術の方が目立っているときというのは、まだまだ普及の途中なのですね。だから、インターネットやITも同様で、それが人々の生活に浸透して目立つことなく活用できるようになったときこそ、本当に人を幸せにする時代になるのではないのでしょうか」

このような富永さんの言葉からすると、インターネットをはじめITはまだまだ黒子になっていないのかもしれない。しかし、実際に富永さんたちはツールとして十分に活用しているし、地域住民を支える活動が幅広く行われていることは事実だ。のぞむらくは、電話のような存在になる日が一日でも早くくること。そんな日はもうそこまできているのかもしれない。

#### 参考文献等]

多摩ニュータウン発 市民ベンチャー NPO 『ぼんぽこ』富永一夫著、NHK出版、二〇〇〇年。

NPO・フュージョン長池 <http://www.pompoco.or.jp/>

多摩ニュータウン事業年表 <http://www.tama-nt.com/library/profile/history/>

『eコミュニティが変える日本の未来 地域活性化とNPO』

E ジャパン協議会編

本体価格：¥1,400

出版：NTT出版

サイズ：B6判 / 242p

ISBN :4-7571-2098-2

発行年月 2003.1